



目次

生産現場情報	： 家族経営協定が法人化への礎に、今後は耕畜連携を目指す	～豊輝ファーム～ P1～4
営農支援情報	： 令和6年産米 秋田県産作況概況	P5～8
県外情報	： 今年も消費地の最前線にて秋田米と県産青果物を販売・PRをしました	P9～10
ご紹介	： 秋田ノーザンハピネッツへ「サキホコレ」を贈呈！	
	～「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクト	P11
	第147回秋田県種苗交換会～鹿角からひびけ未来へ農の夢	P12
	秋田県農業法人協会との情報交換会を開催しました	P13

家族経営協定が法人化への礎に、今後は耕畜連携を目指す ～豊輝ファーム～

1. 設立の背景～家族経営から法人化へ

秋田県北秋田市合川に所在する農事組合法人豊輝（ほうき）ファームは、農業の効率化や家族経営の改善に取り組んできたことが功を奏し、地域農業を支えるという重要な役割を担っています。

元々は家族で経営する農家でしたが、しっかりとした経営管理をするために法人として設立しました。構成員は櫻井代表、父、母、弟の4名です。当初は父が代表を務め、およそ3年前から現代表が役割を引き継いでいます。法人化する前には農業委員会のアドバイスを受け、「家族経営協定※（P4参照）」を締結しています。「家族経営協定」を結んだことにより、家族全員が積極的に関与し、互いの意見を尊重し合いながら農業経営を進めることが可能となりました。

法人名：農事組合法人豊輝ファーム
設立：平成24年（2012年）4月
代表者：代表理事 櫻井 豊
所在地：北秋田市下杉字塚ノ岱11番地2
構成：4名（代表他家族3名）他パート



櫻井代表



水稻圃場

経営概要 I（令和6年度）

◆経営耕地

水稻

①あきたこまち 36 ha

②ゆめおばこ 5 ha

WCS

（ホールクロップサイレージ）

17 ha

大豆 8 ha

そば 6 ha

牧草 3 ha

2. 経営の特色

(1) 牧草・WCS (Whole Crop Silage: ホールクロップサイレージ) の栽培
北秋田市合川下杉地域では、かつて牛の飼育が盛んに行われていました。豊輝ファームは牧草やWCSの栽培を通し、現在も続く地域の畜産農家との連携を行っています。設立時から栽培している水稻や大豆・そばに加え、海外の飼料代が少しずつ値上がりしてきた頃を契機にWCSの栽培に挑戦。現在はさらに輸入飼料作物の価格高騰が進み国産飼料作物の需要が高まっていることから、牧草の栽培面積の拡大に取り組んでいます。

経営概要Ⅱ (令和6年度)

◆保有機械・施設

- | | |
|-------------------|-----|
| ①トラクター (大型～中型) | 10台 |
| ②ロボット田植え機 (8条植え) | 1台 |
| ③コンバイン (6条刈り) | 1台 |
| ④汎用コンバイン (そば・大豆用) | 1台 |
| ⑤乾燥施設 | 3台 |
| ⑥糶摺り機 | 1台 |
| ⑦育苗ハウス | 11棟 |



ボールグリッパー (積込み用)

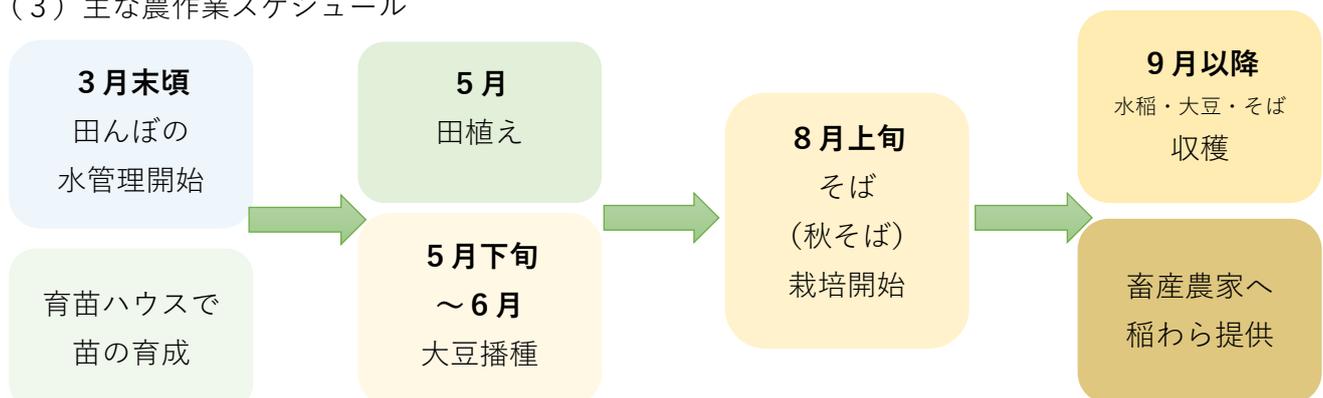
(2) スマート農業技術の導入

豊輝ファームでは、農業のデジタル化・効率化を進めるため、スマート農業技術の導入に力を入れています。圃場管理は㈱クボタ製営農・サービス支援システム「KSAS (ケーサス: KUBOTA Smart Agri System)」を使用して計画的に行っています。

スマート農機はオート機能を備えたロボット田植え機を導入しています。農機のアオペレート作業は通常3名 (代表・父・弟) で行われていますが、ロボット田植え機は1名 (田植え未経験者でも操作を覚えれば可能) から操作することができ、操作者以外は他の作業に集中できるという利点があります。「コスト面が心配だったが、直進アシスト機能を使用することで作業の疲れが断然に違う」と、櫻井代表は話しています。

また、令和6年からは農業ドローンを活用し、遠隔での農薬散布を行っています。

(3) 主な農作業スケジュール



3. 今後に向けて、さらなる挑戦

(1) 耕作放棄地の活用

近年は離農による耕作放棄地の増加が問題となっています。豊輝ファームでは以前に離農した方々から農地の提供がありました。今後増えるであろう耕作放棄地を活用し、農地の維持に努めていきたいとの考えでした。

(2) 畜産農家との協力

豊輝ファームでは、稲わらを畜産農家へ提供しています。稲わらは畜産での需要がとても多いのですが、乾燥などのコントロールが特に難しく、集めるときの天気が重要だと代表は話していました。また、畜産農家から堆肥を譲り受け、農作物に使用し循環させることで環境に優しい農業を目指しています。



(3) おわりに

櫻井代表は毎年1月に行われる「雪中田植え」や「JAまつり（JA秋田たかのす）」などのイベント等に参加し、地域の人々と交流を行っています。これからも地域との繋がりや家族との協力を大切にしながら、持続可能な農業経営を続けていきたいとのことでした。



4. 農業における家族経営協定について（参考）

「家族経営協定」とは、家族農業経営にたずさわる各世帯員が、意欲とやり甲斐を持って経営に参画できる魅力的な農業経営を目指し、経営方針や役割分担、家族みんなが働きやすい就業環境などについて、家族間の十分な話し合いに基づき取り決めるものです。（農林水産省HPより引用）

現在、わが国の農業では家族単位で営む家族経営が多く行われています。家族で行う農業経営は、経営と生活の境目が明確でなく、各世帯員の役割や労働時間や労働報酬などの就業条件が曖昧になり、トラブルが発生しがちとなります。そこで「家族経営協定」を結ぶことにより、持続可能な農業経営へと改善できるようになります。

【家族経営協定の目的】

- ・ 経営と生活の区別を明確にして不満やストレスを減らす
- ・ 家族全員が主体的に農業に参加できる環境
- ・ 次世代へのスムーズな経営移譲
- ・ 男女共同参画を進め、家族全員が尊重される経営

【家族経営協定締結の効果】

- ・ 家族間の役割分担・就業規則が明確に→経営効率化
- ・ 経営理念や目標を共有→家族の意識を向上・協力体制強化
- ・ 後継者や配偶者も認定農業者になるための条件を整備
- ・ ゆとりある将来設計から円滑な経営移譲が可能に
- ・ 農業者年金や新規就農給付金の助成などの制度的な支援

協定締結の手順



◆協定書は、最寄りの農業委員会や県地域振興局農業振興普及課などの指導機関の意見も聞きつつ作成し、指導機関の立ち会いのもと締結することで、より効果的なものになります。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| <p>①家族で話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各自の現状や思い、感謝の気持ちを共有 ・ 現状の問題点や役割分担について意見交換 | <p>②対策を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家事、育児、介護など現在の仕事の分担度合 ・ 負担の軽減や効率化できるかなどの解決方法 | <p>③協定を結ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 条件の取り決め ・ 農業委員会ほか第三者の立ち会いのもとで協定書を作成 | <p>④実行と見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実行状況を定期的に確認 ・ ライフステージの変化に伴う内容の見直し |
|---|---|---|---|

制度上のメリット

○認定農業者制度（平成15年6月～）

家族経営協定の締結等を要件に、夫婦・後継者等による認定農業者の認定の共同申請が平成20年より、同一世帯に属する者に加え、かつて同一の世帯に属していた者（後継者、その配偶者を含む）が世帯を独立した場合でも、共同申請が認められようになりました。

○農業者年金（平成14年1月～）

青色申告をしている認定農業者等と家族経営協定を締結して経営に参画している配偶者・後継者に対しては、基本となる保険料のうち一定割合の国庫助成（政策支援）が行われます。

○農業近代化資金・経営体育成強化資金（平成14年7月～）

経営主以外の配偶者・後継者も当該資金の貸付対象者となります。

○農林水産祭参加の表彰行事における夫婦連名表彰（平成13年度～）

○新規就農対策の青年就農給付金経営開始型の特例（平成24年度～）

そろそろ後継者に任せたい…



詳しく知りたい方は
お近くの**農業委員会**へ
ご相談を！

※給付要件、給付停止要件の詳細は別途確認して下さい。

営農支援部 営農支援課

☎018-880-1011



令和6年産米 秋田県産作況概況

作況指数「102」、作柄「やや良」
県内の予想収量は582kg/10a(前年比+30kg)

1. 秋田県の作況指数・作柄

12月10日に農林水産省東北農政局が発表した今年度の秋田県産米の作況指数は「**102**」の「**やや良**」で、収量は582kg/10aとなりました。

地域別の作況指数は、県北が「**103**」、中央が「**100**」、県南が「**103**」となっており、県北・県南は「**やや良**」、中央は「**平年並み**」の作柄となっています。

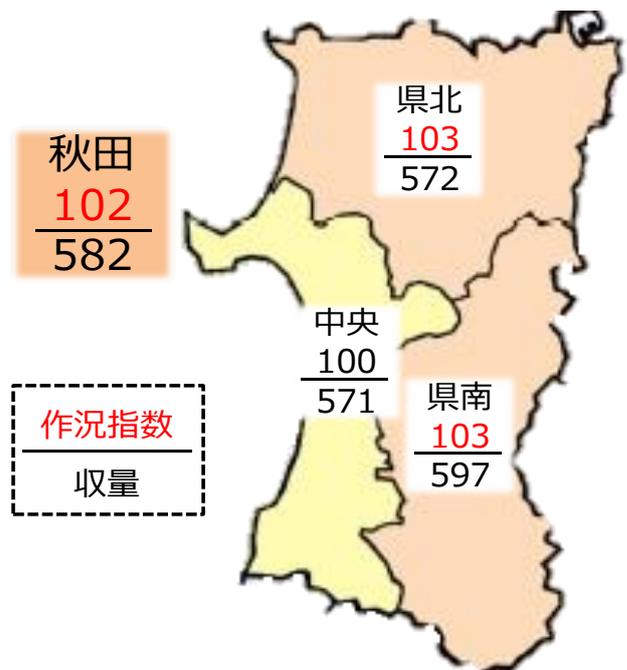


図1 秋田県の作況指数と収量
 (12/10東北農政局発表)

※作況指数は、10a当たり平年収量に対する10a当たり収量の比率で、過去5カ年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、最も多い使用割合の目幅以上に選別された玄米を基に算出。

今年の県内の水稲作付面積は84,200haで、前年産より1,200ha増加しました。このうち、主食用作付面積は72,200haで、前年産より2,300ha増加しました。

主食用の収穫量は420,200tで、前年産より34,400t増加しました。

2. 令和6年産米の生育状況

令和6年産米の稲作期間中の気象は図2(次頁)のとおりで、令和5年度と同様に、日平均気温は期間を通して**高い日**が多くなりました。一方、日照時間は育苗期間中～田植え前半と6月中旬は**多**くなりましたが、出穂期以降は少ない期間もありました。また、今年も7/24～7/26にかけて大雨となり、県内各地で圃場が冠水するなど、被害が発生しました。さらに9月後半にも大雨となり、倒伏に影響しました。

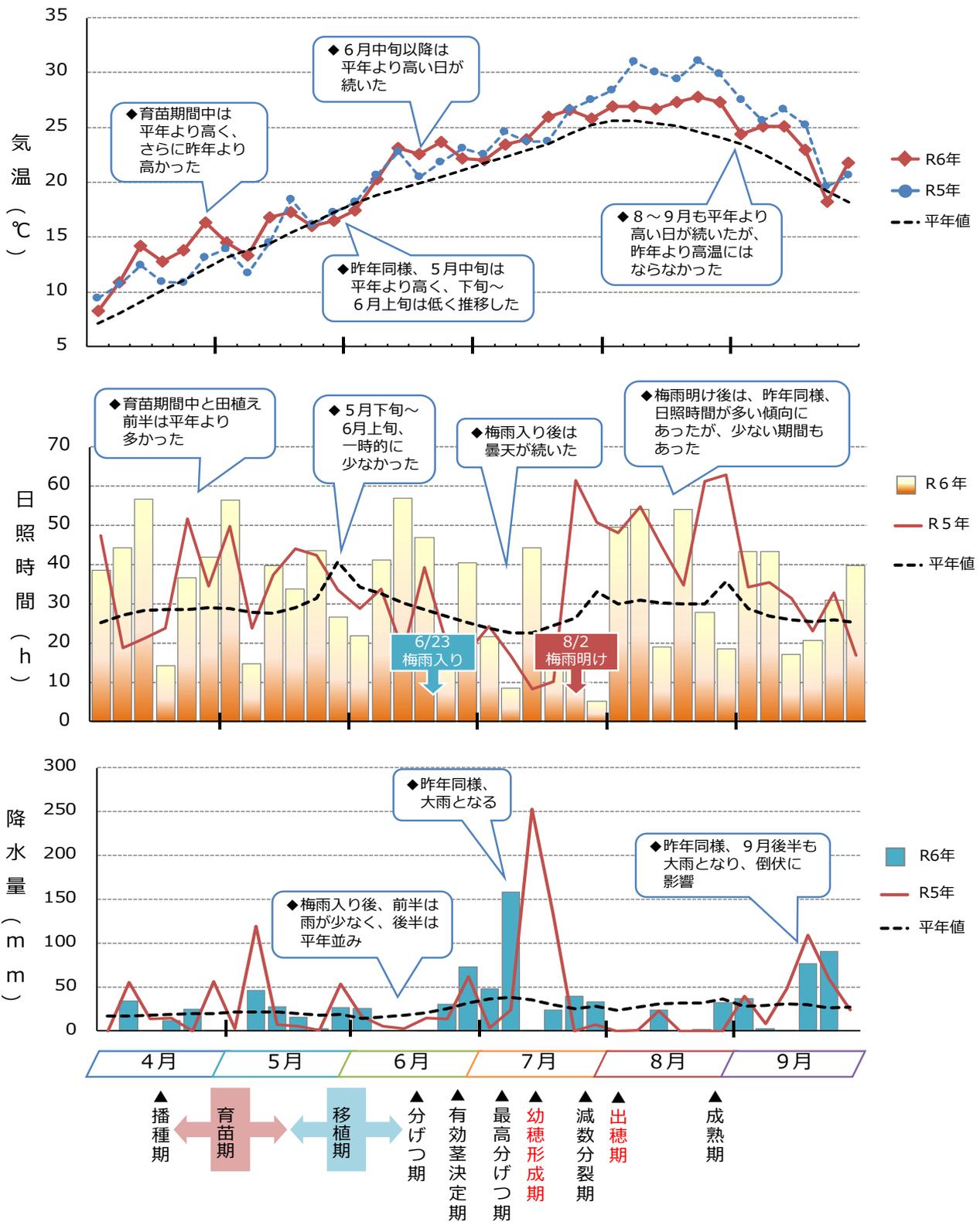


図2 秋田市の半旬別日平均気温の推移（上図）と半旬別積算日照時間（中図）・降水量（下図）

(1) 今年の生育概況

今年も令和5年産と同じく、春先は天候に恵まれ、播種作業や耕起作業は順調に進み、一部で**高温障害**や**ムレ苗**の発生が見られたものの、苗の生育は良好でした。5月は晴れる日が多く、田植え作業も平年並みに終了しました。しかし今年の発根調査では、発根量が平年比95%、発根乾物重が同73%と平年を下回りました。田植え後の強風による葉先の黄化や植代枯れ、一時的な低温により、活着が**平年より遅れた**と推測されました。また、5月下旬～6月上旬にかけ、最高気温が低い期間があり、水温や地温の上昇が緩慢となり、分けつの発生が緩慢でした。そのため、分けつ始期（6/10）の茎数は**124本/m²（平年比84%）**と初期分けつが確保できず、茎数不足が懸念されました。

しかし、6月中旬以降は気温が高く、日照時間も多かったことから、有効茎決定期（6/25）には茎数が**443本/m²（平年比109%）**と平年より多く確保できました。有効茎決定期以降、草丈は平年より長く、幼穂形成期（7/16）には70.1cm（平年比110%）となりました。7月中、**曇天が続いた**ことや、**中干し期間中に雨が多く、中干しが進まなかった**ことにより、土壌が還元的な状態が続いたため、窒素吸収が抑制されなかったことが要因と考えられました。

梅雨明け後の日平均気温は平年より高く推移し、日照時間も多くなったことから、出穂期は平年より1日早い8/1となりました。

令和5年産米は**初期の茎数不足により穂数不足**となり、**m²当たり籾数も少なくなった**ことから、収量は平年よりも少なくなりましたが、6年産米は穂数が451本/m²（平年比101%）、籾数が33.4千粒/m²（同102%）と平年並みとなりました。

今年も昨年同様、出穂期以降も高温・多湿だったため、刈取適期は平年より**5日ほど早くなり**ました（表1）。しかし、9月中旬は雨の日が多く、下旬は天候が回復しましたが、10月上旬に再び雨の日が続いたことから、終期は平年よりやや早い10/13（平年差-2日）となりました。

※生育状況や作業進捗状況は、県 各地域振興局調べ（水田総合利用課まとめ）によるものを参照しています。

表1 積算気温による刈取適期

地域	出穂期			積算気温の到達日 ^{※1}									
	2024	平年	平年差 (日)	950℃						1,050℃			
				2024	日数 ^{※2}	平年	日数	(参考) 2023 日数	(参考) 日数	2024	日数	平年	日数
鹿角	7/30	8/2	-3	9/8	40	9/15	44	9/6	36	9/12	44	9/21	50
北秋田	7/28	8/1	-3	9/3	37	9/11	41	8/31	34	9/7	41	9/16	46
山本	7/30	8/1	-2	9/5	37	9/11	41	9/1	33	9/10	42	9/15	45
秋田	7/29	7/30	-1	9/3	36	9/7	39	8/30	32	9/7	40	9/11	43
由利	7/31	8/2	-2	9/6	37	9/11	40	9/3	34	9/10	41	9/16	45
仙北	7/31	8/2	-2	9/6	37	9/12	41	9/3	34	9/10	41	9/17	46
平鹿	8/1	8/3	-2	9/6	36	9/12	40	9/3	33	9/10	40	9/17	45
雄勝	7/30	8/2	-3	9/5	37	9/12	41	9/4	35	9/10	42	9/17	46

※1 アメダス観測地を用いて算出、平年の到達日は平年の出穂期翌日からの平年値を用いて算出

※2 出穂期翌日からそれぞれの積算温度到達までかかった日数を表す

(2) 令和6年産米の品質

東北農政局が11/29に発表した令和6年産の検査結果において、**一等米比率は88.6%**で、昨年同時期と比較すると、+30.4ポイント（**前年58.2%**）となりました。主な品種ごとの格付は表2、落等理由は表3のとおりで、今年は**着色粒による落等**が56.8%ともっとも多くなっています。

表2 令和6年産米の検査結果（10/31現在、東北農政局）

品種	検査数量 (トン)	等級別比率			
		1等	2等	3等	規格外
あきたこまち	204,478	88.6	8.9	1.5	1.0
ひとめぼれ	12,709	93.8	5.5	0.8	0.0
めんこいな	15,700	89.5	8.8	1.2	0.4
ゆめおぼこ	5,050	89.1	10.2	0.5	0.2
サキホコレ	6,318	97.7	1.9	-	0.4

表3 令和6年産米格付理由

格付理由	2等以下 [※]		
	2024	2023	R1~R5年 平均
着色粒	56.8%	16.3%	33.5%
形質	32.9%	71.9%	51.2%
被害粒	5.9%	5.9%	11.4%

※本年は東北農政局発表データから、昨年とR1~R5年の平均は稲作指導指針（秋田県農林水産部）のデータから引用・算出

昨年は例年になく高温・多照であったことから、**充実度不足粒**や**白未熟粒**が多く発生し、形質による落等が多くなりました。今年は形質による落等は少なくなっていますが、春先の好天や栽培期間中の高温により、斑点米カメムシ類の発生が多く、**着色粒による落等**が多くなっています。斑点米カメムシ類による被害を防ぐには、これまでの基本防除体系による防除を行うことが重要になります（6/25発行、秋田米産地情報第1号参照）。

3. 次年度に向けた対策

今年は昨年に続く猛暑となり高温障害の発生が心配されましたが、生産者のきめ細やかな管理により、品質の良い米ができました。近年は気候変動が激しく収量が不安定となり、その年によって対策が変化していますが、基本技術は変わりません。

秋田地方气象台が発表している2週間気温予報や1ヶ月予報等で最新の気象状況を確認しながら、適切な水・肥培管理の選択を行ってください。

基本技術

- ・土づくり
- ・健苗育成
- ・施肥管理
- ・水管理
- ・発生草種に応じた除草剤選択+適期散布
- ・斑点米カメムシ類防除対策
- ・適期刈取→乾燥調製

高温対策技術

- ・土づくり（ケイ酸質資材使用）
- ・水管理（飽水管理がオススメ）

営農支援部 営農支援課 ☎018-880-1011



県外情報

今年も県外消費地にて秋田米と県産青果物を販売・PRをしました

J A全農あきた消費地販売事務所では、秋田米の需要拡大と県産青果物の直販拡大をすすめ、流通変化に対応したマーケティング機能強化を図り、消費地の動向を的確に把握した有利販売に努め、生産者の手取り確保を目指します。



J A東京アグリパークにて開催5年目となる「頑張ろう東北！復興応援マルシェ」を開催しました。

(3/5~7の3日間)

J A全農は、2015年より東北の食の魅力を全国に広げることを目的に、「全農東北プロジェクト」に取り組んでいます。マルシェの開催や「東北六県絆米」、「東北六花」をはじめとしたオリジナル商品の開発を行っています。



兵庫県神戸市にあるスーパーマーケットmandai (万代) 西神中央店にて、秋田米最上位品種「サキホコレ」の試食・販売キャンペーンを実施しました。

(6/15~16の2日間)



あきた園芸戦略対策協議会（事務局：J A全農あきた）は、横浜市中央卸売市場で秋田県産夏秋野菜と果実のトップセールスを行い、県産青果物を多く取り扱う同市場内の仲卸業者や量販店の担当者に向けてPRしました。
(7/18)



熊本県熊本市のえがお健康スタジアムで開催されたサッカーJ2リーグ「ブラウブリッツ秋田VSロアッソ熊本」戦の試合会場で県産農産物のPRを行いました。
(9/21)



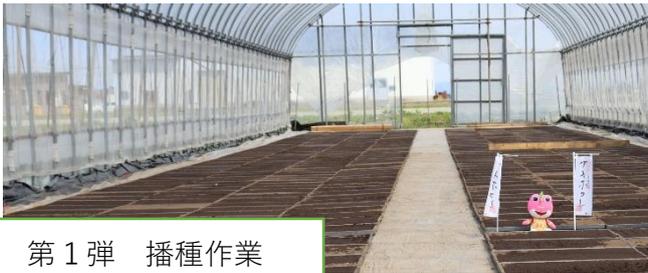
J A全農あきた消費地販売事務所では、引き続き全国展開の販売促進機能をいかし、秋田米と県産青果物の総合的な販売促進と企画プロモーションを行い、秋田米と県産青果物の需要拡大に努めていきます。

また、市場・消費地情報の収集と取引先へ情報提供を行うとともに産地情報を発信し、生産者と消費者を安心して結ぶ懸け橋となります。

ご紹介

秋田ノーザンハピネッツへ「サキホコレ」を贈呈！ ～「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクト

JA全農あきたは12月4日、秋田ノーザンハピネッツへの「サキホコレ」贈呈式を行いました。贈呈式には、JA全農あきたの山田良仁副本部長、秋田ノーザンハピネッツ株式会社の水野勇気代表取締役社長、元田大陽選手が出席し、「サキホコレ」150kgを贈呈しました。贈呈した「サキホコレ」はJA全農あきたが、秋田ノーザンハピネッツ、JA秋田おぼこ、大曲農業高校と共同で農作業体験をおこなう「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクトの一環で収穫された「サキホコレ」です。



第1弾 播種作業



第2弾 田植え



第3弾 溝切り



第4弾 稲刈り



山田副本部長は「サキホコレを食べ、力をつけて、チャンピオンシップ出場、優勝を目指して頑張ってください」と激励し、元田選手へ「サキホコレ」を手渡しました。元田選手は「サキホコレを食べてチームとしてはチャンピオンシップ出場、個人としてはルーキーシーズンなので新人王を狙いたい」と意気込みを話してくれました。また、水野社長は「サキホコレの名前のとおり、チームが咲き誇れるようしっかり戦っていきたい」と話しました。

JA全農あきたは、プロバスケットボール男子Bリーグ1部所属秋田ノーザンハピネッツを2024-25シーズンもオフィシャルパートナーとして引き続き応援していきます。

第147回秋田県種苗交換会～鹿角からひびけ未来へ農の夢

第147回秋田県種苗交換会（主催：JA秋田中央会）が11月1日から11月5日までの5日間、鹿角市を会場に開催され、「鹿角からひびけ未来へ農の夢」をキャッチフレーズに、県内から出品された農産物の展示のほか多彩な催しが行われました。



主会場の鹿角トレーニングセンターアルパスでは、水稻や野菜、果樹、花きなど8部門に出品された約1,200点の農産物が展示され、優れた農産物の出品者には農林水産大臣賞をはじめとする褒賞が贈られました。JA全農あきたの「秋田米コーナー」では、「あきたこまちデビュー40周年コーナー」を設け、あきたこまちの歩みなどをパネルで紹介しました。



協賛第1会場では「農業機械化ショー」が開催され、最新のトラクターやコンバインなどの展示・実演が行われ、初日から多くの人で賑わいました。同会場の「JA全農あきた展」では、肥料・農薬・農業用資材の展示・紹介や「肥料・農薬相談コーナー」「Z-GIS相談コーナー」が設けられました。

来年の「秋田県種苗交換会」は、湯沢市で開催される予定です。

秋田県農業法人協会との情報交換会を開催しました

J A全農あきたは11月14日、秋田県農業法人協会との情報交換会を開催しました。

今年で18回目となる今回の情報交換会には、秋田県農業法人協会とJ A全農あきたの関係者25名が参加しました。

J A全農あきたの山田良仁副本部長は「労働力不足や生産資材価格の高止まりなど農業経営は厳しさを増しており、生産コスト低減や農産物の適正価格が求められている。これまで以上に法人の皆様と緊密に連携しながら取り組んでいきたい。」とあいさつしました。



情報交換会では、J A全農あきたの取り組みと全農物流株式会社から物流情勢について報告をしました。参加した会員からは生産コスト低減や労働力確保、米の作付け等について活発な意見が出されました。

Za・あぐりふおーむ
Zennoh-akita agriculture+reform



J A全農あきた営農情報誌 Za・あぐりふおーむ
第59号 令和7年1月8日発行

編集・発行 J A全農あきた営農支援部営農支援課 〒011-0901秋田市寺内字大小路207の24 018-880-1011